＜様式３＞

学校園教育推進サポート事業　報告書

学　番	１３０５	学校名	新潟小	校長名	山田　浩之	作成者名	竹島　克也
学校教育推進サポート担当者名		竹島　克也				電　話	２２８－３０５９

１　実践のテーマ

通常学級で困難を抱えている児童が笑顔で活動するための支援の工夫
～リソースルームの活用と教育的ニーズに合わせた校内支援体制の整備～

２　テーマ設定の理由

当校には、通常学級において困難を抱えている児童が数多く在籍している。困難さは様々で、知的の遅れやLD傾向による学習遅滞、ADHDや自閉症スペクトラムなどの発達障がい、愛着障がいなど、多岐にわたっている。保護者の理解のもと、特別支援学級への在籍変更を行い、落ち着いて学校生活を過ごせるようになる児童もいる一方、通常学級の学級集団に適応できず、暴言・暴力などの逸脱行動を繰り返したり、校舎内を徘徊し器物を損壊したり、教員に対する暴力を振るったり、不登校になったりする児童もいる。そのため、学校全体が落ち着かず学校崩壊の様相を見せ、本人のみならず周りの児童も苦しむ状況となっている。通常学級で困難を抱え問題行動を起こしている児童への適切な支援は当校にとって喫緊の課題であるとともに、市内の多くの学校が抱える解決すべき最重要課題でもある。

そこで当校では、通常学級で困難を抱える児童が笑顔で活動できるようにするため以下の取組を行う。１つ目は、自分のペースで学習できるリソースルームを設置するなど一人一人の教育的ニーズに合わせた支援である。2つ目は、高い専門性をもった特別支援教育コーディネーター（以下特支CO）を中心に通常学級における特別な支援を必要としている児童に対する人的リソースを集中管理し運用する支援体制を整えることである。これらにより、児童の学習意欲を向上させ、不適切な言動を減らし、笑顔で活動できる機会を増やしていく。当校での取組を広く周知することで、新潟市の通常学級における特別支援教育の推進ならびに生徒指導の課題解決の一助になると考え、このテーマを設定した。

３　実践内容

（１）一人一人の教育的ニーズに合わせた支援

①　リソースルームの設置

対象は、学習面・行動面が原因で通常学級にいられない児童や登校を渋るなどの不登校傾向の児童。本人に合わせた補充学習や関わり合いに関するスキルトレーニングなど、本人の困り感に合わせた活動を個別に行う。また、必要に応じてクールダウンの場所としても活用していく。リソースルームには、特支CO・学級担任・級外職員・支援員・学生ボラ等が可能な限り常駐し、対象児童の支援にあたる。

②　年度初めのスクリーニング

特支COが、全学級を参観し、児童を観察する。配慮や支援が必要な子をチェックし、学級担任と共有する。

③　多層指導モデルMIMの活用

１年生を対象に、朝活動の時間を活用して特支COが実施。読み・書きに困難を抱えている児童を早期に発見し支援を行っていく。

④　校内研修とリンク

校内研修の研究授業において、全体にかかわる手立てに加え、学級で困難を抱えている児童にむけた手立てを指導案に明記する。

⑤　特別支援教育に関する理解の啓発活動

全児童に対しては、年間２回、学年の発達段階に応じて、個性を認め合う大切さについ

て啓発活動を行う。保護者に対しては、入学説明会や学習参観の機会に特別支援教育について理解を深める啓発活動を実施し、特別支援学級に関する意識の変容を促していく。

（２）校内支援体制の整備

①　人的リソースの集中管理

高い専門性をもつ教諭を特支 CO に配置。特支 CO が中心となって、リソースルームの運営や困難を抱えている児童への支援体制のスケジュールを組む。人的リソースを集中管理し支援にあたることによって、より効率的で適切な支援を行うことができる。

②　相談体制の整備

毎月第４水曜日に、各学級の気になる子についての学年会を設定。必要に応じて、特支 CO が学年会に参加をするなど気軽に相談できる体制を整える。

③　継続的なケース会議の運用

リソースルームを活用している児童について、継続的なケース会議を実施していく。

④　特別支援教育に関する職員研修

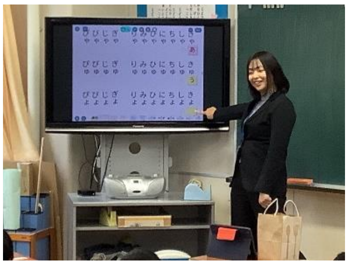
年間２回、外部講師を招いての職員研修を実施し、教職員の特別支援教育に関わる知見を深めていく。

４　実践計画

実施時期	実施内容（研修会、先進校視察、授業公開　等）
４月	全校スクリーニング リソースルーム運用開始
５月	MIM 運用開始（月に１回　計１０回）
７月	職員研修
１０月	職員研修
１月	参観ウィーク 市内の学校を対象にリソースルームなどの取組公開。

５　成果

学習面や情緒面で困難を抱えている児童８名を対象にリソースルームで個別指導を行った。児童は、リソースルームの学習の中で、『できた』『わかった』を積み重ね、自己肯定感を大いに高め、学習意欲を向上させた。さらに、学習意欲の向上がリソースルームで学習している教科以外にも波及し、学校生活の安定につながった。特に情緒面が不安定だった児童については、個別学習以外に自立活動的な視点の学習を継続的に取り組み、授業中の逸脱行為や迷惑行為を減少させることができた。



１年生を対象に多層指導モデル MIM を実施した。週に２度のトレーニングとアセスメントを行い、促音や長音などにつまずきの見られる児童を把握することができた。さらに、その結果をもとに保護者との面談を行い、学級や家庭での学習支援の在り方を確認したり、特別支援学級への在籍変更へとつなげたりすることができた。

校時表を工夫し、水曜日の放課後に学年会の時間を確保した。月末の学年会では、学年の子どもを語る会に設定した。必要に応じて、学年担当の特別支援コーディネーターが学年会に参加し助言を行うなど相談体制を整備することで、円滑な支援を行うことができた。

新潟大学名誉教授の長澤正樹様をお招きして、職員研修を行った。通常学級における困難を抱えている児童への支援の在り方を講演いただくとともに、ケース会議を行い、具体的な支援について助言いただいた。全教職員の特別支援教育に関わる知見を深めることができた。